

『源氏物語』の和歌を読む（八）

加藤 睦

一

冷泉院の後の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

「枯れはつる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけん
今なんことわり知られはべりぬる」とありけるを、ものおほえぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ。（御法巻）¹

紫上の死後に、秋好中宮から源氏に贈られた、この「枯れはつる…」詠について、諸注の解釈は、次に例示するように二つの類型に分かれている。

A 紫上が生前秋を好まなかった理由を推量した歌として解釈。

・凋落の野辺をわびしく思つて亡き紫上は秋を好まれなかつたのでせうか。（全書）

・枯れてしまう野辺の草木を情けなくつらいと思つて、亡き紫上が、秋に心を留め（好ま）ないのであつたであらうか。

・この枯れはつた野辺をさらつて、故人は秋をおきらいになつたのでせうか。（玉上評釈）

・枯れ果てた野辺の風情をお嫌いになつて、亡きお方は、秋に心をお寄せにならなかつたのでせうか。（集成）

B 紫上が秋に未練を残さずに死去した理由を推量する歌として解釈。

・枯れ尽くす野辺を嫌つて亡き方（紫上）が秋に好意を残さなかつたのでせうか。（新大系）

・すべて草木の枯れてしまった野辺の風情をお嫌いあそばして、亡きお方は、秋に未練をお残しにならなかつたのでございましょうか。（新編全集）

AとBとでは、「心（を）」とどむ」という表現の意味に関する理解が異なっており、Aでは、「好む・心を寄せる」の意と解し、Bでは、「好意を残す・未練を残す」の意と解している。

「心（を）」とどむ」という表現自体は、この二つのどちらの意味にも用いることができる表現である。

・風吹けばはこねの山のたまこすげなびきてわれにこころとどめよ
(元真集・二四二)

・みかきよりほかのひたきのはななればこころとどめてをる人もなし
(実方集・一三・うへの御)

・あぢきなきやどにきにけりこのよにはとどめじとのみ思ふ心を
(出羽弁集・七二・「うちかへしてあいなければ」)

・このよには心とどめじあきの月すこしはやつすくもあらなる
(唯心坊集・九三・「月の歌」)

右のうち、「風吹けば…」「みかきより…」では、それぞれ「われ」「はな」に対する「好む・心を寄せる」思いが表現されている。これに対し、「あぢきなき…」のよには…では、この世に「未練を残す」ことをしたくないという思いが表現されている。

秋好中宮の「枯れはつる…」詠は、紫上の死を悼んだ歌である。したがって、後者の意味すなわち「(秋に)未練を残さ」ずに死

去したという意味を全く表していないということは考えにくい。紫上が世を去った季節が秋であったことも、Bの解釈を支持する要素である。

その一方で、歌に添えられた「今なんことわり知らればりぬる」という言葉は、紫上の生前中はわからなかった「ことわり」に触れており、その意味の理解にあたっては、Aのように解釈するのが自然である。

松本真奈美氏は、「枯れはつる…」詠の特性について詳しい検討を加えているが、その論の中で、この歌ならびにそこに添えられた言葉の意味するところについて、次のように記している。

このように草木の枯れ果てた野辺を厭われて、亡き人は秋に

お心を残さずに旅立たれたのでしょうか……。紫の上が秋に生涯を閉じたのは、すべてが枯れる秋という季節を嫌ったこと。紫の上を失ったこの秋の物寂しさを知った今、秋を好む私にも、故人が秋に心を寄せなかつた理由がわかりました。

ここで松本氏は、当該歌の「秋に心をとどめざりけん」については、「秋にお心を残さずに旅立たれたのでしょうか」とBの解釈に従い、「今なんことわり知らればりぬる」の「ことわり」については、「故人が秋に心を寄せなかつた理由」という意味を読み取り、Aの解釈に従っている。

このように松本氏は、当該歌を、秋に死去した紫上の思いを想像したものとして解釈するとともに、添えた言葉を、生前の紫上の、秋ではなく春に心を寄せた思いを振り返った言葉として解しており、「心をとどめず」という表現の両義性を踏まえた妥当な理解を示しているものと考えられる。

残った問題は、紫上が「枯れはつる野辺をうしと」思つて、「亡き人の秋に心をとどめざりけん」と推量する際の、初二句と三句以下の関係をどう理解するかということである。

Aのように「心(を)とどむ」||「好む・心を寄せる」と解する諸注において、「枯れはつる野辺」は「秋」の負の部分で代表する景として解されている。一方Bのように「心(を)とどむ」

||「好意を残す・未練を残す」と解する新大系、新編全集の解釈では、「枯れはつる野辺」をどの季節のものとして解しているのかという点が少しはつきりしないのだが、後者が頭注において、

「秋に…けん」は、秋に亡くなったのは秋を好まなかつたためか、の意。

と解説していることから見て、「枯れはつる野辺」を、やはり秋の好ましくない景と解しているのであろう。

松本氏は、歌意を言い換えて、「紫の上が秋に生涯を閉じたのは、すべてが枯れる秋という季節を嫌つてのこと」と説明していて、「枯れはつる野辺」を秋のものとして把握していることがわかる。以上のように、「枯れはつる野辺」は、秋の景として理解されている。けれども、そのような季節の把握は疑わしいと言わざるをえない。

「枯れはつる野辺」すなわち、草木がすっかり枯れてしまう野辺の季節として想定されるのは冬であり、特別な設定や文脈がない限り、そこから秋を連想するのは自然ではないからである。

・霜がれの草葉をうしとおもへばや冬のの野べは人のかるらん
(貫之集・二一〇・「おほたかがり」)

・見し人も花も木葉もかれはててかきねをあらす冬はきにけり
(康資母集・六八・「冬のはじめ」)

・ひさぎおふるあとのかはらのあさぢべにのこらずしもにかれはてにけり
(好忠集・三二四・「中の冬、十一月上」)

・しもおかぬひとの心もいかなればくさよりさきにかれはてぬらむ
(相模集・五五八・「冬」)

・かれはつるふゆもありけるあきはぎのした葉のいろをなにおもひけん
(為頼集・六三・「人にかはりて、をとこのたえたるころ、はぎをみて」)

右のような用例は、「枯れはつる野辺」が冬の景として認識されるのが自然であることを示している。その冬の景を「うしと」

思うことと、秋に世を去つたこととの間に因果関係を見る「枯れはつる…」詠の理路は、次の歌を参照することによつて、自然に了解されるであろう。

さくらちるはるをうしとやとしをへてかすみをわけてかへるかりがね
(六条院宣旨集・二二・「かへるかり」)

右の帰雁詠では、桜の花が散るのを厭うて、故郷に帰つて行く雁の心が推測されている。この歌と「枯れはつる…」詠との間には、次に示す照応関係が看取できる。

○「さくらちるはるをうしとや」…「枯れはつる野辺をうしとや」

○「かすみをわけてかへるかりがね」…「秋に心をとどめざりけん」

帰雁は、

春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる

のように、初春の景に詠まれることが多い。

「さくらちる…」詠で雁は、花が散るのを厭い、花が散る前を去る鳥として思いやられている。それと同様に、「枯れはつる…」詠で明石中宮は、冬になると草木が枯れ果てる、そのことをつらいと思うゆえに、紫上は、秋のうちに未練を残さず世を去つたのだらうと、想像したのである。

二

さてもまた例の御行ひに、夜半になりて、昼の御座にいとかり

そめに寄り臥したまふ。つとめて、御文奉りたまふに、
なくなくも帰りにしかな飯の世はいづこもつひの常世ならぬ
に

昨夜の御ありさまは恨めしげなりしかど、いとかくあらぬさまに
思しほれたる御気色の心苦しさに、身の上はさしおかれて、涙
ぐまれたまふ。

雁がゐし苗代水の絶えしよりうつりし花のかげをだに見す

(幻巻)

紫上の死後、久しぶりに明石君のもとを訪れた源氏は、夜まで
語り合ったのち、泊まることなく引き上げていった。その翌朝に
二人の間で交わされた贈答に見える、明石君の返歌「雁がゐし…」
については、上の句に紫上死去の比喩を認め、下の句に源氏の来
訪がないことの比喩を読み取る次のような解釈を、諸注が一致し
て示している。

雁がおりてきていた苗代水が絶えてのちは、水に映っていた
美しい花の姿さえ見ないのでございます。上の句は、紫の上
の亡くなったことを喩えていう。…水に映る影に、影を映
す人物を意味する例は、当時の歌に多い。紫の上が亡くなっ
てからのちは、源氏のたまの訪れもなくなったことを嘆く歌。

(集成)

雁がとまった苗代の水がすっかり絶えた時以来、映った花の
かげすら見ない。「苗代水」は故紫上を暗示する。紫上が亡
くなってからあと、貴方様(源氏)の美しい姿を見かけるこ
とがならない、の意。

(新大系)

新編全集は、この歌に詠まれた心情について、頭注に次のよう
に記している。

紫上の死後、源氏の訪れがかえって絶えたとする。源氏の
贈歌に応じて紫の上の死にふれながらも、不訪の源氏への不
満をさりげなく言いこめた歌。

しかしながら、当該歌が諸注が解するような表現と意味の歌で
あるなら、「不満をさりげなく言いこめた歌」とは言えず、花に
喩えながらもあからさまな不満と嘆きを詠じた歌と評するのが妥
当であろう。

・影だにも見えずなりゆく山の井はあさきより又水やたえにし
(後撰集・恋一・五三〇・きのめのと・「あひまちける人
の、ひさしうせうそこなかりければつかはしける」)

・絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水は水草るにけ
り (蜻蛉日記・上巻・道綱母)

このように、男の訪れの途絶えを話題として、水に影が映らな
いことを詠む歌は、絶望的な嘆きや強い不満を表現するのが通例
である。

したがって、諸注の解釈が正しければ、前日訪問した源氏が、
「なくなくも…」と悲しい歌を贈って来たのに対し、明石君はそ
の来訪を無視するかのように「うつりし花の影をだに見ず」と嘆
いたことになるが、これは、内容から見ても歌が詠まれた状況か
らいっても、まことに心ない詠歌ということになるだろう。

さらに、諸注がこの歌から読み取る恨みがましい嘆きには、文
脈からの大きな乖離が認められる。まず、歌の前の文章には、「昨
夜の御ありさまは恨めしげなりしかど、…身の上はさしおかれ

て、涙ぐまれたまふ」というように、明石君の慎みと源氏への深い同情が記されているが、注説の解釈は、そうした明石君の心情とあからさまに矛盾している。また、明石君からの返歌を読んだ源氏の心境は、

古りがたくよしある書きざまにも、なまめざましきものに思したりしを、末の世には、かたみに心はせを見知るどちにて、うしろやすき方にはうち頼むべく、思ひかはしたまひながら、またさりとてひたぶるにはたうちとけず、ゆゑありてもてなしたまへりし心おきてを、人はさしも見知らざりきかし、なご思し出づ。

と記されているが、ここには、諸注が当該歌から読み取る内容を受けた叙述が全く存在せず、生前の紫上のごがしみじみと回想されている。諸注の解釈に伴う、こうした文脈からの乖離は、解釈を訂正する必要があることを示すものである。

・ なき人の影だに見えぬやり水のそこは涙にながしてぞこし

(後撰集・哀傷・一四〇二・伊勢・「なくなりける人の家にかかりて、かへりてのあしたにかしこなる人につかはしける」)

・ 影みえぬなみだのふちのころもでにうづまくあわのきえぞしぬべき

(斎宮女御集・四・さい宮・「女御うせさせたまひてのち、さい院より御とぶらひの御かへりに」)

・ むかしにもかはらずめるいけみづにかげだにみえぬきみぞかなしき

(季経集・八六・「故中殿かくれ給ひてのつぎのとし、た

かくら殿に白河殿おはしますにまゐりたるに、むかしにかはらぬけしきなれど、ただひとりのおはしまさぬ許にてさびしきやうなりければ女房に申しける」)

右の用例から確認されるように、「水に影が見えない」という表現は、男の夜離れの比喩になるだけでなく、故人を哀悼する際にもしばしば用いられる。そういう用法は、『源氏物語』の作中歌にも次のように見出すことができる。

・ なき人のかげだに見えずつれなくて心をやれるいさらゐの水
(藤裏葉巻)

・ 見し人のかげすみはてぬ池水にひとり宿もる秋の夜の月
(夕霧巻)

・ 絶えはてぬ清水になどかなき人の面影をだにとどめざりけん
(東屋巻)

・ 見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせきあへず
(手習巻)

このような用法と、「雁があし…」詠が詠まれた前後の状況から見て、この歌の下の句で「花」によそえられてその喪失が嘆かれているのは、亡くなった紫上と解するのが自然である。この歌には、雁が浮かんでいた苗代水が絶え、それに伴って水面に映っていた花も見えなくなったという景の変化と消失が読まれている。通説ではそれを紫上の死去と源氏の夜離れとに振り分けて理解しているわけだが、そうした分析的な読み方ではなく、情景の変化をそのまま一連のものとして受け止めて、そこから紫上の死去による喪失感を読み取るのが妥当である。

繰り返しになるが、明石君は、自らの恨めしい心情はさておい

て、悲しみに暮れる源氏の姿に涙していた。「雁がある…」詠を贈ることで、明石君は、源氏の悲しみに寄り添い、その嘆きを共有しようとする心ざしを届けたのである。

三

千々の社をひきかけて、行く先長きことを契りきこえたまふも、いかでかく口馴れたまひけむと心憂けれど、よそにてつれなきほどの疎ましきよりはあはれに、人の心もたをやぎぬべき御さまを、一方にもえ疎みはつまじかりけりと、ただつくづくと聞きて、

来し方を思ひいづるもはかなきを行く末かけてなにしたのむら
ん

と、ほのかにのたまふ。なかなかいぶせう心もとなし。

「行く末をみじかきものと思ひなば目の前にだにそむかざら
なん

何ごともいとかう見るほどなき世を、罪深くな思しないそ」とよるづにこしらへたまへど、「心地もなやましくなむ」とて入りたまへり。
(総角卷)

大君の死を嘆く中君に、「千々の社をひきかけて、行く先長きことを契」る匂宮に対し、中君が詠んだ「来し方を…」詠と、それへの返歌「行く末を…」については、二首とも諸注の解釈を見直すべき点があると考える。以下、一首ずつ検討を加える。

◇「来し方を…」の歌について

・今までのお約束を思い出してみても、頼りないことでしたのに、今また将来のことを、何を頼みにするのでしよう。
(集成)

・今までのつれないお仕打ちを思い出すにつけても頼りない気がいたしますのに、行く末のことまで何をあてにせよとおつしやるのでしょうか。
(新編全集)

諸注は、当該歌を、右のように、これまでの匂宮の約束や仕打ちを思い出すと、行く末を契る言葉もあてにはならないという意味に解している。「歌の内容は手厳しい」(新編全集)、「中君のきびしい言葉」(新大系)と評される所以である。

しかしながら、当該歌にみられる「来し方」は、概括的、包括的な言葉であり、「今までのお約束」「今までのつれないお仕打ち」といった意味にただちに限定されるものとは思われない。同じこととは、「来し方を思ひいづるもはかなき」という上の句全体についても言えるのであり、「今までのお約束を思い出してみても、頼りないことでしたのに」(集成)というような具体的な恨み言を性急に読み取るよりも前に、表現をそのまま受け止め、そこから自然に想起されるのは何かを考えてみるのが、まっとうな読み方である。

この歌の上の句は、表現をそのまま理解すれば、「過去を思い出すのものはかないのに(無常なのに)」という意味になる。ここから、中君が、早くに母を亡くし、八宮、大君が世を去ったという、これまでの人生に生じた悲しい出来事を思い出して、世の無常を思っていることを感じ取るのは、決して難しいことではあるまい。大君が亡くなつて悲嘆にくれている中君の心境としてきわ

めて自然だからである。

「来し方を……」詠の下の句は、「千々の社をひきかけて、行く先長きことを契りきこえたまふ」句宮の言葉への批判となつてゐる。けれども、それは、諸注が読解するような、「将来も当てにはならぬと恨む内容」（新大系）を述べた言葉ではなく、これまではかない過去を思えば自分もまもなく世を去るはずであり、その私に行く末かけて契つてもむだである、と言つてゐるのである。

当該歌は、以上のように、句宮の将来を契る言葉や愛情それ自体を疑い恨むことはせずに、その誓いを成り立たせる前提条件を無常観によつて無化してみせている。このように、句宮の言葉に背を向けた和歌として解するとき、「ほのかにのたまふ」という伝え方、あるいは「心地もなやましくなむ」と言つて奥に入つてしまう中君のすげない行動も、よりよく了解されるのである。

◇「行く末を……」の歌について

・ 将来をはかないものとお思ひになるならば、せめて目前でも私に背かないで下さい。
（全書）

・ 行く末を短くはかないものと思うなら、せめて今現在のところだけでもこの私に背かないでほしい、の意。
（新大系）

・ 行末をはかないものとお思いなのでしたら、せめてただ今のところだけでも、この私をお見捨てにならないでいただきたいのです。
（新編全集）

句宮の返歌「行く末を……」に対し、諸注はどれも、右に引用したように原文をそのまま現代語に改めたような解釈を行つてい

る。そこでは、次の二点が、はつきり理解されていないように思われる。

① 「行く末」とは、誰の「行く末」か。

② 「目の前に」とはどういう意味か。

このうち、①について諸注は明示していないので、判断しにくいのであるが、新編全集が、

前歌の意を、肉親に次々と死別した身では将来も長く生きてはおられまい、の意にすりかえて、切り返した。

と解説しているのを参照すれば、「あなたが自分自身の行く末を短くはかないものと思うなら」と解しているものと推測してよいと思われる。

ところで、新編全集が右の引用箇所、中君の「来し方を……」詠を句宮が「故意に」「すりかえた」結果として示した、「肉親に次々と死別した身では将来も長く生きてはおられまい」という解釈は、先に述べたように、「来し方を……」詠がもともと意味している内容そのものである。

古典和歌の贈答歌では、「来し方を……」詠のような、詠者自身の遠からぬ死を意識した歌を詠み贈られた場合、その悲観的な内容をそのまま受け取るのは稀であり、しばしば相手の詠んだ死、あるいは無常を、受け手自身のものにとりなして返歌することが行われる。

この「行く末を……」詠においても、人生の無常を振り返り自身の遠からぬ死を予感してみせた中君の歌を受けて、句宮は、中君のいう短い行く末を自分自身のものにとりなして読むのが自然である。したがって、この歌の上の句は、「私の行く末を短

いものとあなたが思うならば」と解釈するのが正しい。

次に②であるが、「目の前に」という言葉は、「せめて目前でも」(全書)、「せめて目の前だけでも」(大系)、「せめて今のあいだだけでも」(玉上評釈)、「せめて今現在なりとも」(集成)、「せめて今現在のところだけでも」(新大系)、「せめてただ今のところだけでも」(新編全集)というように、曖昧に解釈されている。しかしながら、この言葉は、「この世に私が生きている間、私の眼前で」の意を表す言葉であり、ここでもそういう意味に理解しなければならぬ。

別稿³において、私は、柏木が死の直前に詠み遺した和歌、

目の前にこの世をそむく君よりもよそにわかるる魂ぞかなしき

の初句「目の前に」について、諸注が、女三宮の「目の前に」と解しているのを訂し、柏木の「目の前に」と解するのが正しいことを論述した。その際、

・こむ世にもはや成りななむ目の前につれなき人を昔と思はむ
(古今集・恋一・五二〇・よみ人しらず)

・目の前に変はるはうきになくさめつさらぬ別れぞかなしかりける

(統詞花集・哀傷・四三四・中宮内侍・「あひ知れりける男の身まかりにけるを、いかに思ふらんなど人のとひ侍りければ」)

とともに、当該歌「行く末を…」を引証し、

これらの用例で、「目の前に」は、私の「目の前で」相手が「つれなき」「かはる」「そむく」という文脈を構成してい

る。さらに、「こむ世」「さらぬ別」「短き」行く末との関係において、「あなたも私も同じこの世にいながら」という意味合いを表していることにも注意しよう。

と述べた。「目の前」という表現の、そのような用いられ方は、「源氏物語」における、次の用例からも確認できるであろう。

・惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしかな
(須磨卷)

・限りありて別れはてたまはむよりも、目の前にわが心とやつし棄てたまはむ御ありさまを見ては、さらに片時たふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ
(若菜下巻)

匂宮の詠じた「行く末を…」詠に改めて焦点を絞るなら、この歌の「目の前に」は、自分がまもなく世を去ると中君に思われているととりなした上で、「この世に私が生きているその短い間、私の眼前で」の意を表し、一首としては、「私の行く末が短い」とあなたが思うなら、せめてこの世に私が生きているその短い間だけでも、私から背かないでほしい」という願いを詠んでいるのである。

四

枯れ枯れなる前栽の中に、尾花の、物よりことに手をさし出でて招くがをかく見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露をつらぬきとむる玉の緒、はかなげにうちなびきたるなど、例のことなれど、夕風なほあはれなるころなるかし。

穂に出でぬものおもふらし篠すすき招くたもとの露しげくし

て (宿木巻)

右の句宮詠について、諸注は一致して次のような解釈をしている。

・あなたは顔に出さずに物思ひの御様子ですな、心こめた薫のおさそひがたびたびで。 (全書)

・篠すすき(御身)は、顔色には出さない物思いを(薫に靡こうと)しているらしい、篠すすき(御身)をそそのかし誘う(招く)事が、頻繁なので。 (大系)

・あなたは心中ひそかに物思ひをしているらしい。(薫からの)誘いの手紙が頻繁なので。 (新大系)

このような諸注の解釈において、初二句と三句以下は分離して理解されており、それぞれ中君の心境の推測と、薫の誘いの比喩と解されている。

河添房江氏は、このような解釈とは別の理解を次のように示している。⁵⁾

句宮の「穂にいでぬ」の歌は、中の君を「しのすすき」に

喩えて、中の君が薫をひそかに思っていると二人の仲に嫉妬しているのである。そもそも薄は、女性にとつては喩えられることが、それほどありがたい秋草だったとは思われぬ。

句宮の歌の引歌として、『花鳥余情』の引く『古今集』の在原棟梁の、

秋の野の草の袂か花すすき穂にいでて招く袖と見ゆらむ

(秋上・二四三)

が指摘されるように、風になびく薄(花薄、尾花)は、『古

今集』の時代から、手招きする人の袖に見立てられて、しばしば詠まれている。女性が薄に喩えられるのは、男を手招きする女というイメージになりかねないのである。句宮の「しのすすき招くたもと」にも、その意味で中の君が自分以外の男、つまり薫をひそかに手招いているという当て擦りになっている。

右の引用に述べられるように、薄は女性に例えられることが多く、これを薫の誘いの比喩とする諸注の理解には問題がある。また、諸注は前述のように、中君の物思いと、その原因となる薫の誘いとを、一首の歌から二つながら読み取っているが、それよりも、一首全体を中の君の心境の喩として理解する河添氏の読解のほうに、妥当性が認められると思われる。

以下、蛇足めくが、河添氏の読解を肯定する立場で、一首の構造把握の観点から、短く補足を試みたい。

「らし」という助動詞には、「根拠を示し、現実の状況を推定する意を表わす」(日本国語大辞典 第二版)用法がある。

・ たびねしてつまごひすらし郭公神なび山にさよふけてなく

(後撰集・夏・一八七・「題しらず」)

・ みをつめば物思ふらし時鳥なきのみまどふ五月雨のやみ

(源順集・夏・一六)

・ 大空も秋のわかれをおもふらしけふのけしきはうち時雨れつ

(清輔集・秋・一八七・「雨中九月尺」)

右の三首では、それぞれ、「郭公神なび山にさよふけてなく」「時鳥なきのみまどふ五月雨のやみ」「けふのけしきはうち時雨れつ」という情景を根拠として、「たびねしてつまごひすらし」「物

思ふらし」「大空も秋のわかれをおもふらし」という推定を行っている。

これと同様に、「穂にいでぬ…」の歌は、三、五句に、篠薄の袂に露が多く置いている様子を示し、それを根拠として、初二句で、篠薄が物思いをしていることを推測している。

このように、当該歌は、篠薄の様子とそこから推測される心理とを示しており、諸注の解のように、誘う篠薄に薫と誘われる中君の物思いというように、二つの要素に分離して一首を把握する解釈は不自然である。

この歌では、さらにその篠薄の景とそこからの推測が、全体として中君を寓意しているところに特色がある。おそらくそのことが諸注の解釈に混乱をもたらしたものと思量される。

五

：「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、はてはては、「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひたまふもをかしう聞こゆ。「いでさらば、伝へはてさせたまへかし。この御のがれ言葉こそ、思ひ出づればゆゆしく」とのたまひても、また涙ぐみぬ。

見し人の形代ならば身にそへて恋しき瀬々のなでものにせむと、例の、戯れに言ひなして、紛らはしたまふ。

「みそぎ河瀬々にいださんなでものを身に添ふかげとたれか頼まん

引く手あまたに、とかや。いとほしくぞはべるや」とのたまへば、
： (東屋巻)

右の贈答に見られる「瀬々のなでもの」「瀬々にいださんなでもの」は、祓いにおいて水に流す紙の人形で、浮舟をよそえたものである。

薫が詠じた「見し人の…」は、浮舟が亡き大君の形代ならば、彼女を「恋しき瀬々のなでもの」にしようという歌であり、これに対して、中君は、薫の愛情を疑う歌を返した。

その「みそぎ河…」詠について、諸注は次のように解釈している。

・ 袂河の瀬々に流し出すなでものですもの、浮舟を一生お側に
おいて下さるものと誰が信頼できましよう。(全書)

・ みそぎを川の瀬々に流し出すなでものですもの、一生お側に
おいて下さるものと誰が頼みにしましよう。(玉上評釈)

・ 袂河の瀬ごとに流し出す撫物でしたら、一生お側に置いて頂
けると誰が頼みにしましよう。(集成)

・ 袂河のあの瀬この瀬に流すなでものとは、そんなはかないも
のでしたら、いつもおそばに置いていただけると誰が頼みに
できましよう。(新編全集)

こうした諸注の解釈において、「頼む(=あてにする・信頼する)」行為の主体は、「浮舟を一生お側において下さるものと…」

(全書)のように、浮舟という名を訳出している場合には、「中君」が想定され、「一生お側に置いて頂けると」(集成)のように、浮舟に言及がない場合には、「浮舟本人」あるいは「中君」が想定

されるだろう。一方、「頼む」対象としては、右のいずれの場合も「薫・薫の浮舟に対する愛情」が想定されるであろう。

しかしながら、以上のような解釈では、「身にそふかけと」「頼む」という表現が誤って理解されているように思われる。

中君詠の「身に添ふかけ」は、「妻もしくはそれに準ずるような愛する対象」という意味を表している」と解される。そのことは、

・うちはなひはなをぞひつるつるぎたちみにそふいもしおもひ
けらしも (万葉集・巻十一・寄物陳思・二六四五)

・つるぎたちみにそふいもとりみがねねをぞなきつるてごに
あらくなく (万葉集・巻十四・相聞・三三〇五)

という用例に見える「身に添ふいも」という言葉の使い方を参照すれば、了解されるだろう。

問題は、その後「と頼む」という表現がついた場合の意味がどうなるか、具体的には、「一生お側に置いて頂けると頼みにする」というような、浮舟あるいは中君の信頼を意味するかどうかということにある。

それを確認するために、「つまとたのむ」という表現の用いら
れ方を見てみよう。

・けふよりはつまとたのまむあやめぐさかりそめなりとおもは
ざらなむ

(江帥集・五六・「承暦二年四月廿八日歌合殿上、昌蒲」)

・おしなべてからるとみればあやめぐさわがつまとしもいかが
たのまん (忠盛集・二七)

・としふれどいはふるやの忍草いまはほに出でて妻とたのま
ん (堀河百首・一一二一・公実・「初恋」)

右の用例は、「妻として大切にしてもらえると女が男をあてにする」という意味ではなく、「男が女を妻としてあてにする」の意を表している。

これを見れば、当該歌にいう「身に添ふかけと」「頼む」という言い方が、薫自身が浮舟を妻あるいはそれに準ずる大切な存在としてあてにするという意を表していることが了解できるだろう。

そのことは、次のような源氏物語の用例を見ても確認できる。

・おほかたの世につけてみるには咎なきも、わがものとうち頼
むべき「妻として頼れる人(新編全集)」を選らむに、多
かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。 (帚木卷)

・かの御息所はいといとほしけれど、まことのよるべと頼みき
こえむには「正室としてお頼り申すとなれば(新編全集)」
必ず心おかれぬべし、 (葵卷)

以上のことからわかるように、「みそぎ河」詠の「たれか頼まむ」は、「恋しき瀬々のなでもものにせむ」というあなたの言葉を誰も信頼したりはしない、ということを直接表現したものでなく、あなたが浮舟を身に添う影のように愛するわけがないということを言っているのであり、そのことから、あなたの言っていることは嘘だろうとがめているのである。

注

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』(以下「新編全集」と略称する)により、一部表記を改めた。他の諸注釈書に言及する場合は、以下の略称を用いる。「全書」(「日本

- 古典全書〕、「大系」(『日本古典文学大系』)、「玉上評釈」(『玉上琢彌『源氏物語評釈』)、「集成」(『新潮日本古典集成』)、「新大系」(『新日本古典文学大系』)。
- (2) 松本真奈美「源氏物語の歌ことばと引歌―秋好中宮をめぐって―」(助川幸逸郎ほか編『新時代への源氏学5 構築される社会・ゆらぐ言葉』二〇一五年、竹林舎)。
- (3) 拙稿「『源氏物語』作中歌の読み方」(『韓国外国語大学校』日本研究』六八号・二〇一六年六月)において、このことに言及した。
- (4) 注3拙稿。
- (5) 河添房江『源氏物語時空論』第五部第五章「絵巻の復元模写から読み解く『源氏物語』」(二〇〇五年、東京大学出版会)。

(かとう むつみ 本学教授)